妻有物語
榮榮&映里

凡天(およそ)より形を為して下す物。雨。雪。霰(あられ)。霙(みぞれ)。雹(ひょう)なり。露は地気の粒珠する所、霜は地気の凝結する所、冷気の強弱によりて其形を異にするのみ。地気天に上騰、形を為して雨。雪。霰。霙。雹となれども、温気をうくれば水となる。水は地の全体なれば元の地に帰なり。地中深ければかならず温気あり。地温なるを得て気を吐、天に向て上騰事人の気息のごとく、昼夜片時も絶ることなし。天も又気を吐て地に下す、是天地の呼吸なり。人の呼と吸とのごとし。天地呼吸して万物を生育也。天地の呼吸常を失ふ時は暑寒時に応せず、大風大雨其余さまざまの天変あるは天地の病る也。
(引用文献: 鈴木牧之「北越雪譜初編 巻之上 1837年」)

越後妻有周辺地域は古来より日本有数の豪雪地帯であり、冬となれば雪が風景をも覆い尽くしてしまう。北越雪譜が書かれた江戸時代の遥か昔から、過酷な自然摂理の中で人々は千辛万苦しながら自然と共に生きてきた。2012年、我々自身が自然と人間との関係を問い直すことの必然性から「越後妻有大地の芸術祭」の参加を機会にこのシリーズの撮影を始めた。

「天地呼吸して万物を生育也」古来より人の生死は天地と深い関わりを持ってきた。天地に遵わない生死は後世に深い病を残す。雪の重圧の下で深く息を潜める草木と同じ土壌に私達の命も生まれ育っている。万物生命の営みを内包する森の厳かさは不意に訪れた外来者に戦慄をもたらし、人間に同等の存在ではないことを知らしめる。その強大なものの懐で人々が地道に作り上げて来た里山の風景に向かうと、個の記憶により受け継がれてきた遠い記憶が呼び覚まされる。

この一連の写真は2012年の撮影当初から2014年までの約2年間で、撮影の根本的な方向性が変わった。それは撮影の過程において私達が日本に住み始めた事が影響している。3.11がもたらした甚大な天災と人災は、3年半の年月がたった今でも問題の本質が表出しない故に解決の糸口さえ定まらず、この国全体が混沌に覆われたままだ。撮影当初「妻有」という土地の名称の由来や伝説からイメージした世界観を制作の意図とした。彼の地でゆくあてもなく白銀の迷路を彷徨い、妻有の限界的な自然の中で極限の心情に落ちてゆく男女の物語を想定し撮影した。しかし、撮影を重ねて行くうちに、未来感のない古い美意識に埋もれた世界感を、今更私達が作るべきかという疑念を持つようになった。方向性を失いながらも撮影を続け、完成を諦めそうになったぎりぎりのところで「今自分たちが生きる態度を表明してゆくことこそが私達が求めるべきもの」という創作の根源に立返った。そして八海山の雪解け水の清麗さに救われ、流れがこれまでの創作の根本を成してきた「生命の環」と一体化した時、雪解けの怒濤のごとく流れくる水音に身体の全部が洗い流された気がした。

2012年に共に名ヶ山小学校に寝泊まりしながら山菜狩りに勤しみ、誰より棚田の風景に融け込んでいた、亡き父にこの物語を捧げます。そしてこの物語の制作にご協力いただいたすべての方々に感謝申し上げます。